

Webシステムの効率的開発Ⅱ

－資産の蓄積と再利用による効率化を目指す (リサイクル&ビルド)－

アブストラクト

1. 研究の背景

近年、企業におけるシステム開発への投資はこれまでのメインフレームから Web システムを代表とするオープン系システムへの移行が進んでいる。これは単にハードの移行に伴う投下費用の低減だけではなく、インターネットの普及に起因する B2B・B2C などの外部向けサービスの実現が容易になったこともまたその要因である。

インターネット技術を用いることで企業はこれまで達成できなかったサービスを実現したいと思うと共に、新たなニーズとして「もっと早く」「もっと安く」「もっと安定した」システムの供給を開発サイドに求めるようになってきている。

新たなサービスの実現は、納期の長期化・新規技術使用によるリスクを伴い前述の3点の「もっと」を吸収しきれない場合も発生し得る。しかし、システムを生業とする我々は顧客ニーズを満たすと共に企業利益を追求することもまた重要な責務である。そのため、顧客ニーズと企業利益を両立させるための効率化を模索した。

2. 研究会の目的と進め方

当分科会では、Web システムの効率化とは何かを明示させることこそ主題であると判断した。巷で呼ばれている Web システムとは何かの定義をするとともに、そもそもの開発における非効率要素は各参加者が抱えるシステム開発における問題点であると定義し、具体的にどのような切り口のもと効率化を考えるかを検討した。

また、決定した切り口の運営についても検討するとともに支援ツールを作成した。

- (1) 業務経験など、情報意見交換
- (2) Web システムとはどのようなものなのか
- (3) 顧客とシステム開発側との関係を Web システムの開発という視点から再度明示化
- (4) 参加各自が認識するシステム開発におけるこれまでの問題点はどのようなものか
- (5) 問題点をより解消するための1つの切り口（サブテーマ）の決定
- (6) サブテーマ（『資源の蓄積と再利用』）を実践するための支援ツールの開発
- (7) 『資源の蓄積と再利用』を実践するための提言

3. 研究内容

3.1 サブテーマ決定まで

各参加者の立場・業種の違いにより研究範囲の決定が難航したが、より多くの問題を吸収できる方法として『資源の蓄積と再利用』に決定した。以下が見込まれる効果である。

- 過去に作成したシステムを参考にし、顧客に提示し、意識を共有する
- 過去作成した各種モジュールについて使用頻度が高い場合や作成難度の高いものを再利用することによって開発工程全般で省力化が実現される
- 再利用を考慮した部品化を行うことで顧客に対して一定の品質を提供でき、障害発生率を抑える

3.2 支援ツールの作成

『資源の蓄積と再利用』をより効率的に実現するために、部品と人とを結びつけるための機能が必要と考えた。1つの提案として、簡易的なものだが、部品を容易に検索できる支援ツールを準備するに至った（下図参照）。併せて運営ルールについても列挙している。

新規部品登録

部品名(和名)*	オンライントレード用ユーザ認証		
部品ID*	ABC01	版数	1.0
ステータス*	完了	完成予定日	(yyyyymmdd形式)
開発言語	Java - Bean,EJB	部品レベル	直接利用可
アプリケーションサーバ	Apache Tomcat		
実行可能OS	<input checked="" type="checkbox"/> NT4.0 <input checked="" type="checkbox"/> Windows2000 <input checked="" type="checkbox"/> Linux <input checked="" type="checkbox"/> Solaris <input type="checkbox"/> その他		
テーブル名	User_T,Password_T		
顧客名	ABC証券株式会社		
作成時プロジェクト名	オンライントレードシステム新規開発プロジェクト		
作成者名*	山田太郎		
部品保管場所	¥¥Sv-Source¥ABC-Securities¥OnLine¥Login		
処理概要*	オンライントレードシステム用ユーザ認証部品です。		
最終更新日	20030324 (yyyyymmdd形式)		
部品名(自動入力)	ABC01-1.0-LANG2-SERV0		

登録 リセット

4. まとめ

Webシステムの効率的開発を実施する上で、『資源の蓄積と再利用』は、「見積」「設計」「開発」「検証」の各開発工程にて横断的に作業負荷を軽減させる。さらに顧客と実現されるシステムを早期に共有認識することが可能である。

- すでに存在する資産を有効利用することによるメリットは顧客・システム作成側の双方に利益をもたらす
 - ・ 顧客は要求した内容の事前把握や想像が容易になる
 - ・ システム作成側は障害の少ない、高品質のシステム提供を効率的に実施できる
- システム作成側は、資産化されていない機能に特化し作成を行うため作業負荷の軽減が見込まれる。さらに新規作成部分を必要に応じて資産化することにより効率の継続を行うことができる
- 開発手法や解決方法論にとらわれない効率化が実現される

システムは日々、様々な開発方法論が今後の主流となるであろうと雑誌などで流布されている。裏返すとこれまで流布されていた解決方法論では足りない部分が少なからずあるということなのである。我々の身の回りには失敗した開発もあるが成功した開発もある。過去の成功事例を有効に活用することが次の成功事例につなげる近道である。